ASLE-Japan ／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

October 22, 2001　No. 11

恒例のエクスカーション
----新宿中央公園で

基調テーマは
アーバン・
ネイチャー

ASLE-J／文学・環境学会第7回全国大会報告

大会運営委員　太田雅孝（大東文化大学）

2001年9月15～16日

晴れ曇の渋谷はやや蒸し暑かったが、青山学院大学総研ビル11階第19会議室はエアコンが効いており、気持ちいい雰囲気の中で、午前中に役員会、午後に入って第8回総会、次いで2時過ぎより第7回全国大会が催された。

簡単な挨拶のあと、早速研究発表会が行われ、最初に本田蘭子さん(愛媛大学大学院修士課程)が「19世紀イギリスの＜自然＞表象」という題の発表を行った。博物学から風景庭園、温室、アクアリウム、壁紙など、外部から徐々に生活の内部に縮小化されて持ち込まれた自然を取り上げ、そうした自然の装飾品化や植物支配などに当時の帝国主義的イデオロギーを読み取り、自然の所有や支配欲望を示唆する興味深い発表であった。（司会は、太田。）

次に大神田丈二さん（山梨学院大学）の司会により、川谷弘子さん（中央大学大学院博士課程後期）が「自然で読む*The Sun Also Rises*」と題する発表を行った。従来人間中心の物語として解釈されてきたヘミングウェイの『日はまた昇る』を、＜自然＞の観点を大きく取り込み、同時にバフチンの祝祭に関する考え方を導入しながら、豊穣な大地の再生に繋がる物語として読み替えることを提唱した発表であった。

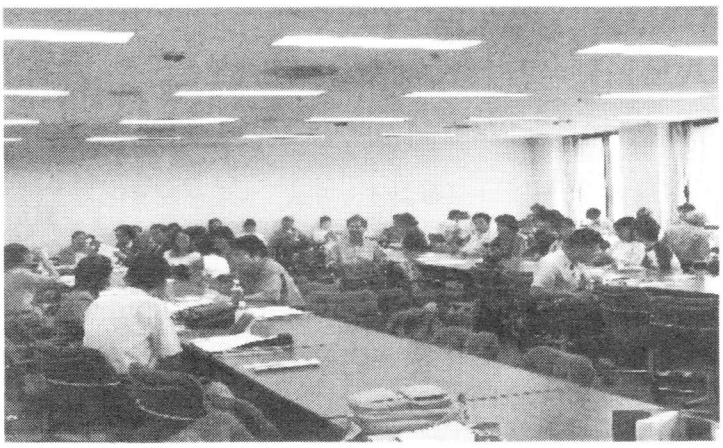
最後に伊藤詔子さん（広島大学）の司会により、平塚博子さん（上智大学大学院博士課程後期）が「フォークナーにおける女性の身体と自然」と題する発表を行った。フェミニスト研究者Donna Harawayの批評枠組みに準拠しながら、セックスやジェンダーの関係などを考えることで自然と文化の錯綜する場としての身体を捉えなおしていく方向で、フォークナー文学における氾濫する川と女性の身体について、ポスコロのエコロジーとフェミニズムの観点から考察した発表であった。

どの発表も真摯な質疑応答がなされ、的確なアドヴァイスは今後の研究課題として重要なものが多々あったように思うが、ここでは煩瑣になるので省略する。

ふと気がつくと、会場にはおよそ70人前後の参加者が見られ、盛況の観を呈していた。　発表会に続いて、午後4時より野田研一さん（立教大学）の司会で、作家の加藤幸子さんをお招きしての講演会

が行われた。講演題目は「ツバメが語る自然保護」で、全体としては、加藤さんの昆虫少女時代の、自然との親密な関わりを持つお話から、今回のシンポジウムのテーマであるUrban Natureに沿った話として、東京湾の埋立地を「卸売市場建設予定地」から「東京都野鳥公園」に変えた加藤さんらの市民運動のお話、さらに都会でのツバメの巣作りと餌場消失のお話、そして、1999年に出版された『ジーンとともに』（新潮社）の巻頭掌編「火の恋」という、アカショウビンという鳥が自ら語る＜擬鳥化＞という独特の形式を試みた短編に触れる形での楽しいお話をしていただいた。生き物の側に立つ視点を獲得することで、自ずと見えてくる人間中心主義的な現実が問い直されるという、加藤さんの批評方法がよく理解されたと思う。暖かい語り口と、冷静に自らを振り返る省察力に裏打ちされたお話に魅了され、会場はいつになく和やかになり、その雰囲気は懇親会にも反映されることとなった。

懇親会は、午後6時から木下卓さん（愛媛大学）の司会で、青学会館にて催され、40人前後の参加をみた。2時間ほどの間であったが、会場のあちこちでこの日の発表や講演に関しての話や、楽しい情報交換が行われ、とても和やかで充実したものになった。他の学会とは大いに異なるASLE-Jの大会として、やはりこの懇親会まで含めて考えるのがいいのではないかと思った。その意味でも、今後、大会参加者がより気軽に懇親会に参加していただけるよう望みたい。



翌日（9月16日）は、朝10時からシンポジウムということでやや参加者数が心配されたが、それはまったくの杞憂となり、会場の時にはすでに40人以上の聴衆が集まった。テーマは最近のASLE-USAの学会で話題となっているUrban Natureで、笹田直人さん（明治学院大学）の司会で行われた。

最初に山里勝己さん（琉球大学）からこのテーマの学問的近況紹介があり、従来人気の高かったアメリカのWilderness聖域化志向のパラダイムが排除してきた部分の見直しとして、もっと多くの人の身近なところに目を向けるということからUrban Natureという関心への移行が急速に行われつつある現状を伝えた。これは、ソローを始め、アビーやディラードらの従来主流とみなされてきた流れからの離脱を予想させ、今後の文学と環境の問題を考える上で大きな転換点となるかもしれず、これからも議論沸騰の観があるのではないかと思われた。山里さんの発表は、いろいろ関連する研究者を出されての、目配りのいいパースペクティヴ紹介であると同時に、こうした二分法を乗り越えるためのWatershedという考え方を用意しておられ、できればもっと詳しく知りたい気持ちにさせられた。

二人目は岩政伸治さん（東京外国語大学・非）で、上記の山里さんの発表にも出てきたMichael BennetやCrononらの考え方を引用とともに概説し、Urban Natureという自己撞着的な用語の使用は、＜エコクリティシズムにもっと社会的な機能を担わせようとする政治的戦略である＞とした上で、さらに＜人間の居住する場所として自然を認識し、そこに住む人間の環境的影響を精査しようとする態度＞を望ましく考えているパラダイムと見る。そうした観点への関心が高まりを見せるのと対照的に、今度はソロー離れといった現象が出てきていることにも言及された。これは、従来のエコクリティシズムそのものの脱構築の必要性が強く意識されているものと思われる。さらに岩政さんは＜環境的公正＞や＜環境人権主義＞の問題が今後の問題として控えていることを示唆され、最後に西田幾多郎の視点にまで言及して興味深い発表となった。

最後は作家の中村邦生さんが、小説家の観点から面白くも鋭い指摘をなされ、聴衆の耳目を集めた。当日午後に中村さんが自らガイドを引き受けてくださった新宿超高層ビル街を巡る野外研修を念頭に置きながら、住友ビルの片隅にわずかスプーン一杯ほどの土に花を咲かせたニラの話を始めとして、野村ビルのミニサンクチュアリのムクドリ、新宿中央公園の滝の命名に関するレトリック、あるいは自然の見立てなどについて縦横無尽に語られた。特に中村

さんは、都市と自然は自分にとって対立したものではなく、むしろいつも一つのものとして感じられていたという。マクロコスモスとミクロコスモスを媒介するミディアコスモスとしての都市の空間で自然との出会いを愉しんでいるといって、作品の創作過程をさまざまな例を挙げて語られた。とりわけ土地の記憶という歴史性に着目し、都市の記憶というものが自然を見るときにどう介入してくるのか、という問題を提議され、かつての冬の甲州街道で肥桶を引っ張る馬がいた話ではその人糞が売買されていたが、そうした昔からの生活様式が1964年のオリンピックを境に一挙に消えていったこと、また、熊野神社や淀橋の話、つまり室町時代に紀州からきた鈴木九郎という成り上がりの高利貸しにまつわる不気味な話など、ダイナミックな都市論となった。最後は都市空間というテキストを読み解く愉しみ、および捏造する愉しみを小説家の視点から十分な説得力を持って語られた。三井ビルのガラス窓やある神社の力石の話題の中で、＜土地の持っているものによって書かされた＞という言い方をされたのが印象に残った。

こうした知的にも感覚的にも愉快なお話を伺え、朝早くから駆けつけた聴衆は十分来た甲斐があったのではないだろうか。これで第7回の全国大会はエクスカーションを残して幕を閉じた。最後に山里代表が挨拶をされ、この大会が無事終了したこと、また会場校の手配をしていただいた高田賢一さん（青山学院大学）に御礼を述べた。

エクスカーションは、今大会の基調テーマとなったUrban Natureにふさわしく、午後1時半に新宿西口交番前に30名前後の希望参加者が集合した。これまでで最高の人数ではないかと驚嘆する方もおられた。天気に恵まれはしたものの、やや蒸し暑く、参加者は汗を流しながら歩くこととなった。しかし、中村邦生さんの楽しい語らいの雰囲気の中で、多くの方々はメモを取り、写真を撮りながら、好奇心をそそられる場所に改めて都市を読むことの新鮮さに気づかされていた。上記の中村さんのお話の中に出てきたさまざまな場所を巡り歩き（中には、中村さんがそのデザインを嫌う東京都の庁舎ビル屋上展望台も含まれ）、結局、散会となったのは、午後5時頃であった。最初の企画より1時間半も超過し、足が痛くなったが、それを押しても歩き続けたのはこの野外研修の面白さゆえであったかと思う。おそらくこのような遠足は二度とできないだろう。

だいぶ長くなったので、ここらでこの大会報告を終わりたいと思う。最後に、お世話になった会員、あるいは非会員や学生諸君のご協力に感謝したい。さらにまた付け加えて、来年のことを言うと鬼が笑うが、どうせ笑われるなら再来年のことを言っておくと、春頃にASLEの国際大会が予定されている。たぶん、その際にも今年のテーマが大きく関与してくるのではないかと思う。日本からの独特の発信が期待されるところである。

加藤幸子氏の特別講演をうかがいながら

佐藤　光重（慶応義塾大学・非）

９月１２日の午前１時頃ふとテレビをつけたわたしは、アメリカでの同時多発テロ事件を知り、今年の全国大会に出席するまでの３日間はニュースづけの毎日であった。ＮＨＫの衛星放送でＡＢＣニュース、有線放送ではＢＢＣ，ＮＰＲ、ＶＯＡニュース、ケーブル・ネットワークではＣＮＮと、かわるがわる視聴し、新聞もしばらくは『ヘラルド・トリビューン』を配達してもらうことにした。この事件が世界の政治、経済に与える影響は計り知れないが、もうひとつアメリカのＣＮＮニュースで夙に指摘されていたのが人心の荒廃であった。たしかに、あの映像を繰り返し眼にし、飛び交う悲しみや恐怖、憎しみの言葉を耳にしてばかりいると、それまで楽しんでいた文学作品も急に味わえなくなってしまうような寂寞とした無感覚に陥ってしまいそうである。このようなしだいで土曜日を迎え、わたしは午前中ずいぶんとげんなりした気分であった。

戦争を境に文学の思潮はこれまで劇的に変化を遂げてきた。南北戦争によりロマンティシズムからリアリズムへ、第一次世界大戦によりモダニズムへ、第二次大戦によりモダニズムの見直しがなされベトナム戦争によりポスト・モダニズムへというように。今回の出来事が文学の思潮をいかに変えて行くのかわれわれはこれからじっくりと見極めていかねばなるまい。ただし、そうした大きい変化はただちに現れるわけではない。大きい変化とは一過性のものではなく、後世になにかの遺産を生み出すはずであり、そうした物事は地道な研究、創作活動からでなくては生じないであろう。

一瞬にして数千の尊い人命が奪われるのを目の当たりにした今だからこそ、人間だけでなく私たちを取り巻くひとつひとつのいのちを慈しむことを思い出さなければなるまい。加藤氏の講演をうかがっている間に、そのようなことを考えた。軒に巣をつくるツバメの営みを見守ること、都会の一角に野鳥の生息地を確保すること、鳥の身になって小説を書いてみようとすること、こうした話を聞くひとときを持ったことは、事件により自らの気分が荒廃していくことの危機を改めて気付かせてくれた。ニューヨークには無数のろうそくが灯され、セント・パトリック教会では壮大なミサが捧げられたが、そこに集う人々もわれわれも、殺伐とした心を静め、ひとつひとつのいのちを慈しむ心から本当の追悼を捧げたいものである。

第４回ASLE-US大会報告

ブルース・アレン（順天堂大学）

2001年６月１９日～２４日

二年に一度のASLE-USの大会も今年で四回目を迎えた。"Making a Start Out of Particulars"と銘打たれた今年の大会は、６月１９日から２４日までアリゾナ州フラッグスタッフで開催された。アメリカ合衆国の他にオーストラリア、カナダ、イギリス、フィンランド、ドイツ、アイルランド、イタリア、日本、韓国、ノルウェー等から、おおよそ４７５名が参加した。ASLE-Japanからは、伊藤詔子、上岡克己、加藤貞通、茅野佳子、上地直美、山城新、石幡直樹を含む諸氏と筆者（ブルース・アレン）が参加した。会場となったノーザン・アリゾナ大学のキャンパスは、標高2,100メートルの山並み豊かな高地に位置し、清らかな空気、豊かな緑、古めかしく趣のある町並みを備え、近くにはグランドキャニオンや、ホピ族、ナバホ族のインディアン居留地があったりと、大会の環境として理想的であった。ASLE-Japanからの参加者の中には、この辺りの山並みが東北の磐梯山に似ていると評した人もいた。この大会のプログラムは、１２３ものパネル・ディスカッション（約４名の発表者から構成される）、９の全体会、１０以上のフィールド・セッション、様々なワークショップ、書籍の展示、ASLEメンバー達による演奏会、作家を迎えてのレセプション、宴会、そして総会と、大変意欲的なものであった。天候にも恵まれ、研究発表、エクスカーション、親睦の時間などのバランスも丁度良く、大変楽しい有意義な大会であった。

口頭発表の数のあまりの多さとテーマの多岐性故に、ほとんどの人が全体のスケジュールのほんの一部しか消化できなかったのではなかったかと思われる。一日のスケジュールは９の時間帯に分けられ、一つの時間帯につき１４のセッションが同時に行われた。しかしスケジュール調整にも工夫がなされ、各セッションは次のように分類された。１９世紀文学、教育学、環境的公正とポストコロニアリズム関連のテーマ、アーバン・ネイチャー（都市の自然）、地域研究、エコクリティシズムと批評理論、詩の批評、クリエイティブ・ライティング、コンピューターとメディア関連のテーマ、その他。このような調整のおかげで、膨大かつ多岐に渡る研究発表のスケジュールは整理され、一つの時間帯に似通ったテーマが重複するような事態は避けられた。

NAUの朝

作家自身による作品の朗読を特色とした三つの全体会では、ノンフィクション作家ジャニス・レイ、同じくノンフィクション作家ゲーリー・ポール・ナブハン）、そして詩人のオフェリア・ゼペダとサイモン・オーティッズを迎えそれぞれ開催された。ジャニス・レイは、ジョージア州南部の松林の美しい自然のなかで ― その生態地域もここ数十年の間にひどく破壊されてしまったが ― 貧しい廃品回収業者の娘として育ってきた自らの経験を織り交ぜながら、彼女の新作*The Ecology of a Cracker Childhood* から一節朗読した。彼女は、崩壊した地域と生態系の諸問題が、いかに私たちの生活と社会システムの崩壊の問題と深く関わっているかを、ユーモアと哀しみそして前向きな希望を交えて語っ

た。

著名なネイチャー・ライターで、民族植物学者でもあるゲーリー・ナブハンは、文学と環境科学の新しい融合の必要性を訴えた。彼は、ネイティブ・アメリカンの人々が糖尿病、肥満、心臓病などの慢性病を克服するのを援助するという彼の最近の活動について語った。これらの病はネイティブ・アメリカンの人々が、西洋型の不健康な食生活を取り入れていくなかで、彼らの伝統的な食生活を捨ててしまったことと深く関係がある。南西部からコルテスの海までの長い行進などを含む最近の活動のおかげで、彼らは、現地から採れる自然な食材による健康な伝統的食生活を再発見することが出来た。ナブハンはまた本大会主催のエクスカーションのリーダーも務め、参加者を彼の自宅付近にある松林に案内し、自然の観察と描写について様々なアドバイスを与えてくれた。

ナブハンのEthnobotany Hike風景

１２０を超える研究発表のなかには、幾つかの重要な新しいテーマが取り上げられていた。私たちが注目したものでは、アーバン・ネイチャー、ナラティヴ研究に対する新たな関心、エコクリティシズムの理論を科学、なかでも生物学や進化生物学の分野における最近の成果と合体させようという関心の高まり、そしてソローやスーザン・フェニモア・クーパーなど１９世紀に活躍したネイチャー・ライター達の再評価を巡るものなどが挙げられる。

とりわけ興味深いラウンド・テーブル・ディスカッションで、海外からの参加者にとっても特別関心を引いたものとしては、"ASLE-Overseas: What's Happening Elsewhere in Ecocriticism?"が挙げられる。これにはオーストラリア、フィンランド、ドイツ、韓国、日本（加藤、石幡）、ノルウェーそしてイギリスからの発表者が参加した。イギリスの発表者は、ウィルダネス（Wilderness）の概念がいかにイギリスとアメリカとでは違うかということを指摘した。この指摘については、他の国々の発表者も同意見であった。カリキュラムに総合的かつエコクリティカルな研究を盛り込もうとする試みとその難しさについて語る人もいた。

その他では、古典的でロマンチックな自然観と最近みられる環境文学への倫理的アプローチとの間に生じる亀裂、そしてエコクリティシズムによる特定のテキストのキャノン化の危険性についての意見も出た。石幡は、「自然」という日本の概念と、場所やモノとしてより狭義に理解されがちなネイチャーという西洋の概念との違いについて述べた。韓国の発表者は、アメリカ文化帝国主義の気配のせいで、韓国がエコクリティシズムに対して持っている抵抗感について述べ、現地特有のエコクリティシズムの発展を呼びかけた。韓国では、近いうちにASLEを立ち上げたいという動きがある様子である。そのことを視野に入れ、近い将来ASLE-Japanの大会に韓国の（そしてその他のアジアの国々から）代表者を招待することも考えられよう。オーストラリアの代表者は、フランスのポストモダニズム理論の優勢がエコクリティシズムの受け入れを難しくしていると述べたが、一方その受け入れに関する希望的見解にも言及した。２００２年の夏に、（オーストラリアにASLEを設立する準備として）ブリズベンに於いてエコクリティシズムと環境文学の国際会議を開く計画が進行中である。

さらに次のような発表が行なわれた。

●バートン・レヴィ・セント・アーマンドその他は"Spiritual Contours in Relation to Nature"というタイトルにて発表。宗教と科学を一体化しようとしている科学者、作家及び文芸批評家の試みがふえてきている点を指摘。特にＥ．Ｏ．ウィルソンやスティーヴン・Ｊ・グールドその他の環境文学批評家たちによる作品が言及された。

●加藤貞通は、日本の里山の概念を紹介し、物質的・生物学的レベル、社会的レベルおよび精神的なレベルで、持続可能な「身近な自然」の伝統を保全復興することが２１世紀の重要な課題であると論じた。今森光彦、井上ひさし、石牟礼道子の作品を取りあげ、ゲーリー・ナブハンとウェンデル・ベリーにも言及した。

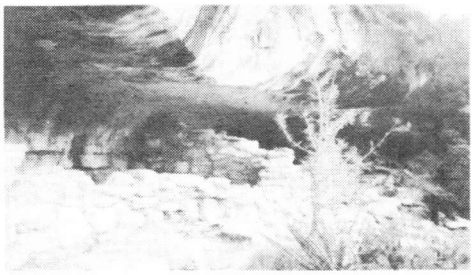
●アーバン・ネイチャーをテーマとするパネル・ディスカッションも行なわれた。この中には東京のアーバン・ネイチャーについて論じた筆者（ブルース・アレン）の発表も含まれる。アメリカのネイ

チャー・ライティング及びエコクリティシズムは、原野での体験を非常に強調してきた（あるいは強調しすぎてきた）と一般に見なされているが、現代社会に歩調を合わせ、都市人口が増加している事を踏まえて、世界規模で読者及び研究者に訴えかけていこうとするなら、もっとアーバン・ネイチャーを重視していかなければならないだろう。

●他に、カオス理論、ポストモダン理論についても発表が行なわれた。さらに、ラップ・ミュージックがアーバン・ネイチャーを理解する上で、伝統的ロマン主義及びパストラル的アプローチよりもずっと効果的であるという意見も出された。

●本大会でのフィールド・セッションの中にもアーバン・ネイチャーに関するものがあり、フラッグスタッフの繁華街のガイドツアーが実施された。率いたのは地質学者で、建築物と文化及び地元の建材の相互関係が説明された。

Walnut Canyon



●次期ASLE会長のテレル・ディクソンは、いくつかあるアーバン・ネイチャーのセッションの司会者であり、このテーマにそった研究を続けている。というわけで、アーバン・ネイチャーが今やASLE及びエコクリティシズムにおける重要なテーマとして脚光を浴びつつあると言えよう。

●"Service learning"に関する特別ワークショップも設けられた。これは現在アメリカの教育機関で注目されつつある選択科目で、学生は様々なコミュニティ活動を行なう事によって単位を得られるようになっている。学生が選べるプロジェクトは、たとえばエコシステムの復元や動植物の保護などの環境関係の活動から、ホームレスの人々や１０代で妊娠した女性、麻薬常用者の救済などへのボランティア・プログラムを含んだ社会活動にわたっている。この"service learning"というプログラムの目的は、学業と自然環境や普段ふれることのない社会層との接触の橋渡しをすることにある。

大会最後の総会にて現在ASLE-USの会員は約１０００名であり、そのうち約１５０名はアメリカ合衆国以外の国の会員であることが明らかになった。次回の大会は、東部のどこかで開かれることも発表された。またASLEのLの字をliteratureからlanguageにしようという提案がなされた。この見解の支持者はlanguageにした方が現在我々が行なっている活動や今後の活動方向をより包括的に表せるとしている。しかしながらこの提案にはかなり異論も多く、今後の討論と票決が待たれる。

さて大会はアカデミックな面ばかりではなく、リクリェーションももちろん行なわれた。旧交を温め、新たな人脈を作り、リラックスする機会が数多くあった。エクスカーションはいくつもあり、アリゾナ州北部の美しい自然を満喫する様々なチャンスに恵まれた。ハイキングや写真撮影旅行、地元のネイティブ・アメリカンの村を訪れる旅など、よりどりみどりであった。セッションのスケジュールは目白押しだったが、その合間をぬって共に昼食をとったり、夕食に町へ出かけたりするチャンスもあった。芝生にすわっていてもよかったし、寮に集まって会話を楽しむ事もできた。またＡＳＬＥメンバーたちが毎晩ライブ・フォーク・ミュージックのセッションをひらいてくれたので、共に歌ったり昔をしのんだりすることもできた。

そしてツアーのハイライトとして、ホピ・インディアンのカチナ霊やトリックスターの伝統舞踊を見ることができた。ホピ族の儀式はどれも雨乞いの祈りの形式をとっており、今回も踊りが進むにつれて、輝くばかりの晴天が雲わき涼風がたつ天候へと変わったのだった。現実には雨は降らなかったが、夏の乾季が数日のうちに終わり、雨が降り出すであろうことがはっきり予測できた。

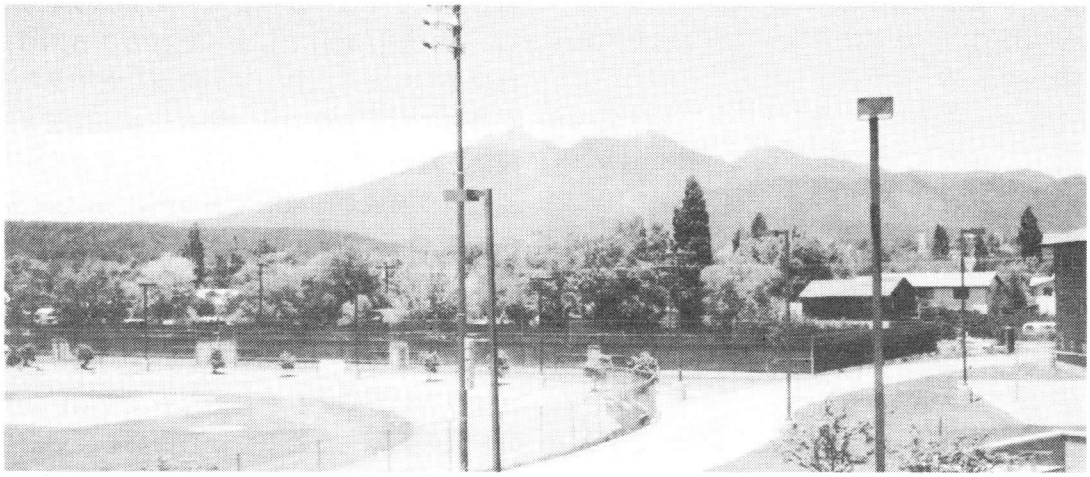
本大会の開催場所はほんとうに申し分なかった。それだけに日本から出かけたメンバーたちにとって、最大の心残りは、前期の授業を終えるために日本へトンボ帰りせざるを得ないことであった。できるならアメリカ南西部の大自然や史跡などをゆとりをもって見て歩きたかったのだが・・・。

（翻訳：相原優子、近江満里子）

CALL FOR PAPERS

オーストラリア，ブリズベーンのクィーンズランド大学でECC (Environment, Culture & Community)学会が開かれます。日時：2002年7月2～5日

詳しくは次のウェッブサイトをご参照ください：http://emsah.uq.edu.au/conferences/ecc/index.html



San Francisco Peaks

ASLE フラッグスタッフ大会報告・補遺

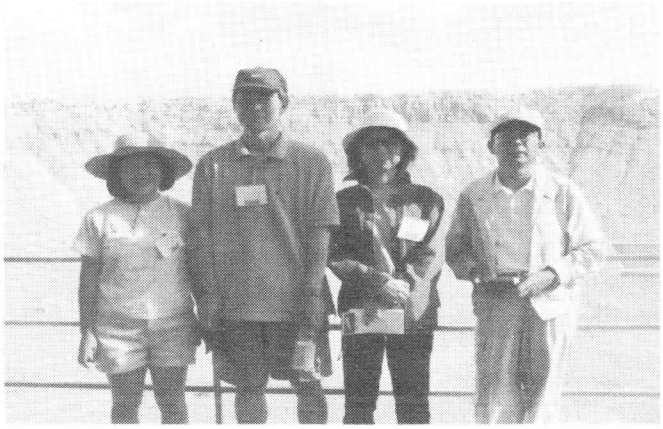
山城　新
（ネヴァダ大学レノ校・院）

初日の分科会 "Home Alone: Poetics and Power of Dwellings"ではインディアナ大学の上地直美が、現代アメリカ建築の草分けであるフランク・ロイド・ライトがいかにホイットマンの時間と空間の概念に影響を受けたか、具体的にライトがどのようにホイットマンの"Song of the Universal"を利用し、砂漠の地でタリエッセンウエストのデザインを通して自然と文化とを調和させようとしたかをスライドを交えながら論じた。ピーター・クイグリーは西洋建築の歴史を手短に概観し、「いかに自然と生きるべきか」という問題が常に内在していたことを論じ、環境思想や環境運動に影響を与えた人物たちも「居住すること」を著作の中ではなく自分たちの実際の住居の建築に意識的に示していることを論じた。扱った建築家、思想家、作家や詩人たちの例を一部挙げれば、スイス生まれの建築家で都市化の問題に意識的に取り組んだル・コルビュジェ、ディープエコロジー運動の生みの親、アルネ・ネスのTvergarstein (タカの巣）、ヘンリー・ソローのキャビン、ロビンソン・ジェファーズのトーアハウス、ゲーリー・スナイダーのキットキットディジー等である。表題にあるように同セッションでは、上地の発表を含め発表者の多くは文学テクストに留まらず幅広い学際的な視点から「住居」がどう文学で表現されてきたか、「居住すること」という文化的活動を通して自然とどう調和しようと試みてきたかを論じていた。

同日午後のセッションの"Four on Thoreau"においては高知大学の上岡克己が "Thoreau and the Endangered Species: Reading the Landscape out of Concord"と題し、ソローの生きた時代には「絶滅危惧種」という確立された概念がなかったにも関わらず、ソローの作品に見られる森林伐採の問題、頻出する産業発展の表象等、ソローが描くコンコードの風景には必然的にその問題が内在していたと論じた。ネバダ大学の山城新はソローの『ケープコッド』におけるビーチの描写を分析し、ソローがそこに「野生」を見ただけではなく、まさに現れようとしていた大衆文化的なビーチの概念を見ていたことを分析し、ビーチという場所が彼の後にアメリカ文学におけるテーマとして確立したと論じた。同じネバダ大学のトッド・フィッシャーはソローのサブライムの概念を「カターディン」とエマソンとの関係から心理学的な「恐怖」の観点から論じていた。質疑応答の際に神学的な分析なしにソローのサブライム論は成り立たないのではという批判もあったが、フィッシャーの分析のもう一つの主題はソローのサブライムをどのように実現させるかという現代的な問題にあったのであり、更に彼の発表がナラティブを実践するという立場であったということがあまり伝わっていなかったようだ。

今回の学会で見られた傾向としては、ソローを中心的に論じたセッションはこれだけであり、いわゆる「脱ソロー」的な雰囲気があったことを指摘しておきたい。もちろんソロー関連の発表は（プログラムを瞥見する限り）まだまだ多くあったようだが、いわゆるローレンス・ビュエルの*The Environmental Imagination*の確立した感のある、ソローを中心としてネイチャーライティングを研究するという傾向か

砂漠の巨大隕石孔



ら距離をおいたような雰囲気があったようだ。

２１日の午前中セッション "Colloquium on the Roots of Western Attitudes Towards Nature" では「自然」という概念が西洋哲学の立場から様々に論じられていた。発表者の面々をみてもお分かりかと思うがかなり聴衆を集めていたセッションの一つであった。その中でマックス・オレシュラガーは "Post World War II Advances: The Studies Leading Towards Sustainability"と題する発表で、いかに「文字書き能力が我々にとって見えないものであったか、あたりまえのものとして認識されていたか」という問題を焦点に当てながら科学的知識の問題や、社会科学的な「自然」の議論を、もっと根本的な言語の問題へと転換するよう論じた。１９世紀後半から２０世紀後半のヨーロッパ哲学を概観しながら、チャールズ・ダーウィンをして、「人間が言語を持っている」という概念を生物学的にかつ哲学的に提示した初めての人物の一人であるという主張やハンス＝ゲオルク・ガダマーの解釈学やウィル・ライトの思想がエコクリティシズムに有効であろうという示唆など刺激的なものであった。最後の発表者のルイズ・ウェストリングまであまり時間が残っていなかったのが残念だったが、彼女も少ない持ち時間の中で強調していたものの一つで都市の自然についてエコクリティカルな批評がもっと出てくるべきだという主張であった。

その次のセッションの"Narrative Ecocriticism: Consulting the Archive of the Feet"でイアン・マーシャルとデーヴィット・テイラーの二人による発表 "Searching for John Burroughs: A Catskills Dialogue"ではジョン・バローズに因んだニューヨーク州東部のキャッツキルでのハイキングの過程を、音楽とスライドを交えながら、散文を中心にして二人で交互に語った。テイラーがヘンリー・デーヴィット・ソローの人気に隠れてしまった感のあるバローズを再評価しながらバローズの直面したであろう風景を描いていくのに対し、マーシャルはテイラーを観察しながら、自分とバローズとを客観化していくという構成が印象的であった。*An Alchemy of Genres: Cross-Genre Writing by American Women Poet-Critics* (1992)で知られるダイアン・フリーマンによる"Memory Works: Saving Landscape"という二番目の発表は自分の飼っていた犬の話を軸として「失うということ」を詩的な散文で朗読した。自分の犬の記憶をたどりながら直面している風景を自分で精神分析的に解体していく流れは、フリーマンが批評と散文のバランスを意識的に釣り合わせているのであろう、非常にうまく調和していたようだ。ナラティブスカラーシップ的な発表は珍しくなくなってきたが、その人気に併せて、そのアプローチが自己満足的だとか批評性に欠けるといった批判も多い。フリーマンは特に意識的にナラティブスカラーシップを批評のディスコースとして使っているようだ。

ASLE-Jメンバーで、明星大学で教鞭をとる茅野佳子は２２日のセッション "Women's Novels of Contact"で "Reading Cather's Nature Writing in Death Comes for the Archbishop"と題した論文を発表した。キャザーのこの小説がみせるのは彼女がアメリカ南西部で実際に接した自然であり、この作品でみられる南西部の風景が示すのはキャザーの得た自己の再認識である。この小説を単なる虚構ではなくキャザーの人生と重ね合わせ、そこに現れる風景を背景としてではなくキャザー自身の心理的な表象として読むことでキャザー研究に新たにネイチャーライティング的なアプローチを導入したといえる。

グレン・ラヴ司会による２２日の全体会、ジョセフ・キャロルとマキシン・シーツ＝ジョンストンによる "Biology and Ecocriticism"はもっとも参加者の注目を引いた発表の一つであっただろう。キャロルはまず知識やその所産である文学を生物学的な現象であるという前提に立ち、特にポスト構造主義を中心とする現代文学批評論を意味のない非決定論で更に偏狭な原典主義だと手厳しく批判する。キャロルが自身の文学批評を展開する際に依拠する生物学的な立場として：人間を含む生物とその環境の関係の重視、生まれながらの精神構造は進化論的に自然淘汰のプロセスによって形成されてきたという認識、すべて人間の直接的な目的は総合的な健康の原則に

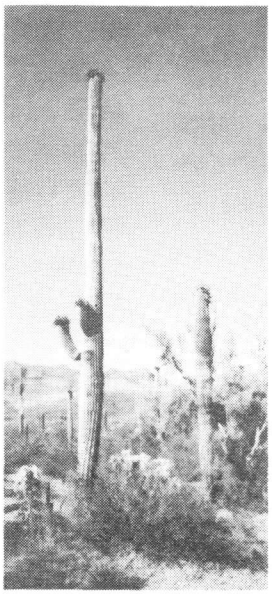
よって根本的原理として規定されているという認識（具体的に性交と子孫を残すための生殖活動が人間と文学の第一の関心事であるということ）、更に文学的表象は人間の心理的な反応の写像であるという概念、に立つ。これらの立場を更に詳しく進化論的生物学の特徴を説明しながら現代文学批評を鮮やかに分析した。

シーツ＝ジョンストンはダーウィンの進化論に加え現象学を積極的に文学批評に応用し、まず我々のこの世界での直接的な経験がすべて我々の知識を構成する第一の要素であるとする。ネイチャーライティングという分野がダーウィンの進化論と密接な関係にあるとする。その根拠としてネイチャーライティングが作者の自然との直接的な関わりを扱うか、第三者の自然との直接的な経験を扱うかのどちらかだからで、それは結局精神がどのように身体的な自然との関わりを認識するかというプロセスを表しているからであるとする。最後にダーウィンの進化論を手短に説明しながら、ダーウィンもネイ

ASLE大会に初参加して

茅野佳子（明星大学）

初めてのASLE大会は、フェニックス空港に着いたその時から、環境と自然に目を向けさせてくれた。空港から１４０マイル北のフラッグスタッフまで参加者の車に同乗させてもらうことになり、華氏百度を越える灼熱のフェニックスを出ると、砂漠の生態系に大きな影響を与えている巨大サボテンSaguaro（遠くから見ると人の姿のようにも見える）や近づくだけで針が突き刺さるというサボテンCholla（llaのところはyaと発音）の生息地が広がっていた。車は少し遠回りをして、様々な形をした赤茶色の岩山に囲まれたセドナという町を抜け、やがてハンフリーズ・ピークの濃紺の峰がくっきりと見える北アリゾナ大学の広大なキャンパスへ。



大会のプログラムは盛り沢山で、同時進行のセッションの中から選択するのが難しかったが、文学作品や絵画の中に描かれている自然と人間の関わりに興味があったので、関連したテーマを扱っているセッションを選んで参加した。いくつかのパネルで取り上げられていたのは、アメリカ先住民作家（Leslie M. Silkoなど）の作品に見られる土地に対するエコロジカルな視点、砂漠の中に社会的束縛を解き放ちヒエラルキーを覆す潜在力を見るMary Austinの視点、アメリカ南西部の砂漠と動物の死骸に画家としての独自のテーマを見つけたGeorgia O'Keeffeの視点など。いずれの視点も、Rachel Carsonが*The Sense of Wonder*の中でその大切さを訴えた、自然の驚異に感応する経験が根底にあるのを感じた。

私が参加した最後のプレナリー・セッションでは、二人の先住民作家（アリゾナ州ツーソン在住のOfelia ZepedaとSimon Ortiz）が語りかけるような調子で、海や川や大地と人間との関係をテーマにした詩の朗読を行ない、言葉と声とリズムとが互いに影響し合う中で、シンプルな文の繰り返しが次第に力を帯びて胸に響いてくるのを感じた。Rueckertが言うように、詩人の経験が独自の視点と想像力・創造力によって言葉に姿を変え、読む人の心に伝わり新しい経験になるという「文学と生態系の間を循環するエネルギー」を、二人の声を通して実感できたのだと思う。

Willa Catherの愛読者である私には、*The Song of the Lark*の中で主人公が「癒し」を経験し「啓示」を受ける場所として描かれていた、Walnut Canyonのハイキングも印象的だった。アメリカ南西部の自然に魅了されていたCatherが、そこを吹く乾いた風には、人の心を解き放ち、若さを運んでくる何かがあると繰り返し書いているが、確かにそんな風が吹いているような気がした。北アリゾナの大自然と、自然を愛し大切に思う人たちとの集いの中で、日本からはるばる運んでいってしまった日々の疲れが癒され、今後の研究課題と指標、そしてエネルギーをたくさんもらって帰ってくることができた。次の大会もぜひ参加したいと思っている。

チャーライター同様にわれわれの実際の経験なしの世界の存在を否定しているのだと結論づけた。

両者の発表はグレン・ラブが一貫して主張し続けているエコクリティシズムの将来の方向性の具体的な例であろう。進化論や生物学の分野は特に最近文学批評に応用され、エコクリティシズムの中で学際的なアプローチを精力的に発展させている。ナラティブを強調する方向性が次第に人気を得ている一方のアプローチであるとすれば、今回の学会で目を引いたのはこのような科学を積極的に応用した発表であっただろう。

２２日午後の発表でもう一つ紹介しておきたいのは "Are They or Aren't They? Placing Problematical Figures in Environmental Literary Studies" と題したセッションでフランク・バーゴンとダニエル・ペックによるジョン・バロウズと　スーザン・フェニモア・クーパーについての発表である。バーゴンはバロウズがネイチャーライターとしてあるいは環境運動に影響を与えた作家としてあまり評価されていない状況に、身近な自然を描くバローズとは対照的にアメリカ文学が「ウィルダネス」を描く作家を礼賛する傾向があるということ、バローズの環境思想があまり理解されていないこと、等を挙げた。ペックはスーザン・クーパーがソローの『ウォールデン』としばしば比較されて評価されている傾向を批判し、ソローではなく父親ジェームズの影響がかなり色濃くでているのであり、もっと広いコンテクストで読まれるべきであると論じた。

両者の発表が示しているのは今回の学会のもう一つ目に付いたソローからの遠心的な傾向である。確かにネイチャーライティングを語る際にソローの影響は大きい。しかしこのセッションでも示されているとおり、ソローの作品でアメリカ環境文学を定義するときに少々問題がでてくる場合がある。それはあくまで例外なのか、それともソローを軸としたアメリカ環境文学の定義に限界がでてきたのか。これから更に環境的視点からアメリカ文学史の読み直しが広がるにつれ、ソローは試金石として出てくるのは間違いないが、その視点自体も常に問われなければならないのであろう。

『たのしく読めるネイチャーライティング』を楽しく授業する：授業実践報告

上岡　克己（高知大学）

文学・環境学会が総力をあげて編集した『たのしく読めるネイチャーライティング』（ミネルヴァ書房、２０００）は、ネイチャーライティングや環境文学の入門書、研究書としては最高の部類に属することは衆目の一致するところであろう。しかし研究書として読むことと、大学のテキストとして教えることには大きな差が感じられる。

本書で取り上げられた作家・作品は日英米114人、１２０作品におよび、時代も４００年間にわたっている。その上、本書の副題が「作品ガイド」となっているように、一人の作家・作品にわずか２ページが割り当てられているにすぎないので、テキストとして教える際には教える側に相当の教授法と努力が要求される。

以下は２００１年度前期におこなわれた私の授業実践報告である。時間的制約と、教える側の関心から授業で取り上げた作家・作品は「選択的」であったことをお断りしておく。半期の授業期間ですべてを講義することは無理である。文学史の講義と重なることは最初から避けた。またテキストの解題だけでは学生が退屈するのは目に見えているので、できるだけ原文にふれさせることを目標に、ハンドアウ

ト（原文の重要箇所をコピー）を配布した。履修者数が多く、環境を考えて両面コピーにしたため、毎回の準備は大変であった。

授業実践

授業科目：「環境文化論」

授業目標：自然と環境を描いた日英米の文学作品を取り上げ、環境の世紀といわれる２１世紀を生きる意味を問う

受講生：１３０人（レポート提出者は１０５人、全員が人文学部の２回生以上の学生）

第１回：序論　ネイチャーライティング、環境文学の定義、動向、意義について説明。使用テキストの説明。

第２回：学生の関心を引きそうな日本文学から始める。「日本人の自然観」を説明した後、『おくのほそ道』へと移る。日本のネイチャーライティングの創始者としての位置付けをおこなう。芭蕉のあとは『武蔵野』（ハンドアウト配布）へ。このわずか１００年間の東京の変貌、つまりは自然の変化を語る。『みみづのたはこと』で補足説明。

第３回：テキストにそって南方熊楠、宮沢賢治、中西悟道の説明。補足として地元との関連で、寺田寅彦、牧野富太郎を取り上げた。石牟礼道子『苦海浄土ーわが水俣病』のハンドアウトの配布。『フォリオa』第５号、生田編「ジャパニーズ・ネイチャーライティング」を参考にして説明。カーソン著『沈黙の春』との比較をおこなう。

第４回：有吉佐和子『複合汚染』（ハンドアウト配布）、野田知佑『日本の川を旅する』（「四万十川」をハンドアウトとして配布）四万十川とダムについての説明。山尾三省『聖老人』（ハンドアウト配布）

第５回：英米文学にはいる。White『セルボーンの博物誌』（ハンドアウト配布）ハンドアウトは地元出身の西谷退三訳を使用。一生を翻訳に捧げた西谷の生涯を概説。

第６回：Wordsworth『湖水案内』、湖水地方の説明として、Beatrix PotterのPeter RabbitやNational Trustの話をする。Wordsworthに関しては、有名な詩"The Tables Turned" "The Rainbow" "The Daffodils"をハンドアウトで配布し暗唱。

第７回：Emerson（ハンドアウト配布）、Thoreau（ハンドアウト配布）

第８回：Melville, Whitman, Mark Twain、Muir（ハンドアウト配布）

第９回：Leopold（ハンドアウト配布）

第１０回：Rachel Carson（ハンドアウト配布）

第11回：Hemingway, Lindbergh(ハンドアウトには落合恵子訳を使用)

第１２回：Abbey, Snyder, Maclean, LaBastille, Mitchell, Williams

レポート課題

① 授業で取り上げた作家・作品　②テキストで取り上げられている作家・作品　③自然や環境に関する書物　のなかから一つを選び、自然や環境の視点から３０００~４０００字程度で論ぜよ。

提出されたレポート

日本文学　宮沢賢治　１３、国木田独歩　３、野田知佑　２、松尾芭蕉　２、宮崎駿　２、その他　２１（池澤夏樹、高田宏、今西錦司、幸田文、星野道夫、笹山久三、岡島成行、知里幸恵、太宰治等）　計　４３

英米文学　Carson 18, Hemingway 13, Lindbergh 7, Thoreau 6, Twain 3, Muir 2, Maclean 2 , その他　(White, Leopold, LaBastille, Melville, Nelson, Ackerman, Ehrlich, Mowat等)　計　６２

総括

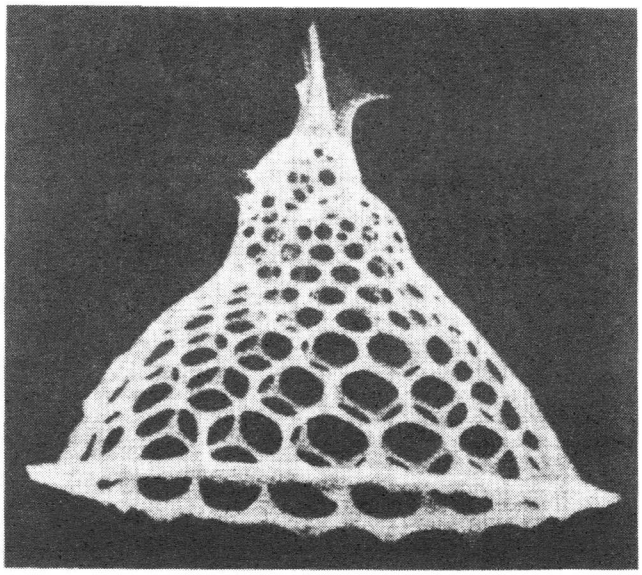
日本文学で宮沢賢治が突出しているのは、本学に宮沢賢治研究会があり、活発に活動しているためだと思われる。英米文学でCarson, Lindbergh, Thoreauが多いのは授業で詳しく取り上げたため。Hemingwayは『老人と海』の知名度であろうか。「キーワード」については、授業の際に適宜利用したが、レポートを見る限りでは学生自身が使いこなせるにはいたっていなかった。今回のレポートを通して、学生たちが自然と環境について考える機会がもてたことは、彼らのこれからの人生にも少しはプラスになるであろうと期待したい。授業法については改善の余地がありそうである。スライドやヴィデオの活用も考えられる。本書に関して、会員各位の授業実践をお知らせいただければ幸いです。

エコクリティシズム研究会で*Leap*を読む

熊本早苗（東北大学・院）

2001年8月11日、広島大学に於て第12回エコクリティシズム研究会が開催された。この研究会は、毎回充実した内容となっているために、中国・四国地方にとどまらず、九州・鹿児島や遠く東北地方からの参加者がある。今回取り上げた内容は、Terry T. Williamsの*Leap*（2000)と、*PMLA: Globalizing Literary Studies* (Jan. 2001; 116:1)であった。特に*Leap*は、日本では、結城正美氏の書評以外、未だ充分な紹介がされているとはいえない作品であることから、ここでは主に*Leap*についての報告を行いたい。

*Leap*は、ウィリアムスがネーデルランドの画家ヒエロニムス・ボッシュ（Hieronymus Bosch, 1450-1516)の祭壇画『快楽の園』（*El Jardin de las Delicias*,1504）に魅了され、画の中に自らの "spiritual evocation"を見出して書かれた作品である。『快楽の園』の左翼パネル<天国>には、アダムとイヴの他にピンク色の衣服をまとったキリストや捕食する爬虫類が描かれている。中央パネル<地上の快楽>には、裸体の男女の倒錯した性や植物と鉱物を組みあわせた奇怪な建物があり、そこには主にエロスの世界が描かれている。他方、右翼パネル<地獄>には、巨大な楽器の拷問具、樹幹人間、爆発で炎上する森や町が描かれている。人間の貪欲の罪を強調し、そのことを諭す為の宗教画でありながら、その爬虫類・獣類・植物の混合物によるボッシュ独特の幻想世界が、ウィリアムスを特異なイメージの世界へと導いたのである。



有孔虫

*Leap*は４部構成からなり、第１部 "Paradise," 第２部 "Hell,"第３部 "Earthly Delight" の順に展開されていく。これは、ボッシュの三つ折りの祭壇画が開かれて目に入る順番と同じである。第４部 "Restoration"では、「私」が『快楽の園』の修復作業(restoration)に参加し、自らの信念、家族、そして世界に対して抱く愛情の修復がなされた経緯が述べられている。

伊藤詔子氏は、*Leap*の第１部 "Paradise"における作家の伝記的事実と『快楽の園』の関係性を報告し、来日聖徒であるウィリアムスがなぜ中世の聖母マリア兄弟会のボッシュの画に圧倒的な魅力を感じたのかをまとめた。さらにその際、ウィリアムスがボッシュの画を "landscape"として捉え再構築していると指摘し、彼女が双眼鏡で画の中の35 種類の鳥をバードウォッチングする行為に関して分析するなど、非常に興味深い議論へと発展させた。

大島由紀子氏は、同じく "Paradise"において語られているヴィジョンについて報告した。「私」は、『モルモン書』(*Book of Mormon*)に没頭していた時に得たヴィジョンと、ボッシュの画の中に入り込んだ時に得たヴィジョンを交互に語るのだが、自分自身がボッシュの画の中で暮らしているという思いを強くするのである。

城戸光世氏は、第１部"Paradise"のラストに描かれている炎や燃えるイメージからの連想が、第２部 "Hell" の地獄の炎へつながることを指摘し "Hell"前半部分の報告を行った。 "Hell"で「私」は、地獄における階段の多さや、眼球や目の器官へのこだわりを示している。地獄画に入り込んだ「私」の左目は溶けかけた氷上に転がりながらも、その眼球はまだ見ることができるのである。さらに「私」は、野性と芸術についてのイメージを語っていく。

熊本早苗が報告した "Hell"中間部においても、引き続き野性と文明の双方における悪魔的事象（企

業買収に伴う環境と伝統文化破壊）のイメージやエピソードが交互に描かれている。「私」は、ボッシュの画の中に入り込み、燃える森の中で痛みの叫びをあげている森の精と出会うのだが、その際、「私」は自らの乳癌の家系と傷跡について告白し、森の精の痛切な叫びへと一体化していく。

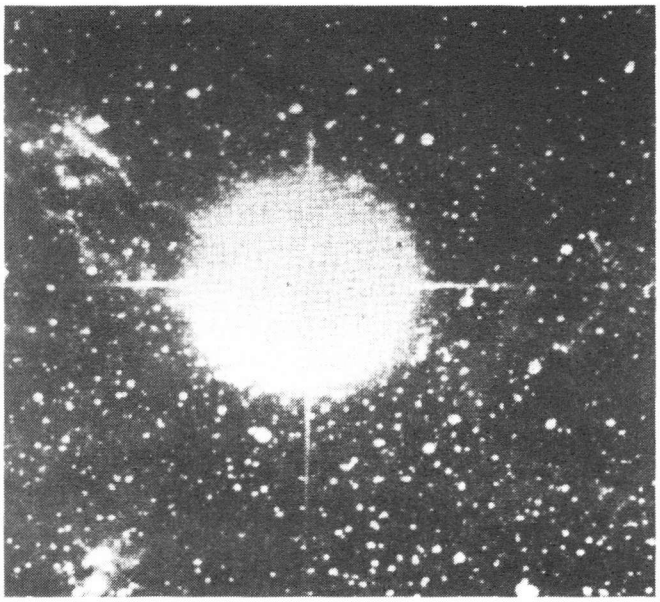
辻和彦氏が報告した "Hell"後半部では、魂の死こそが地獄であると語られている。そして、地獄において拷問具ともなっている中世の楽器が奏でる不協和音が、「私」の身体が抱える不協和音のカオスと共に描かれている。つまり、地獄における聴覚の役割、あるいは現世における聞く行為について述べられているのである。＜地獄＞後半部では、聖ヨセフの農神祭で燃える炎という、再び火のイメージで締めくくられている。

第３部 "Earthly Delight"においては、「私」がボッシュの画に入り込む幻想的な場面と並行して、彼女が画を通して知りあった人々の人生についても語られている。塩田弘氏は、「私」が庭において大地に寝そべる行為の宗教的意味を指摘し、ありのままで生きていこうとする場面を報告した。新福豊実氏は、ボッシュの画を模写するMarikoと「私」の芸術論の展開を報告し、そこにおいて「私」がモルモン教的立場でカトリック教を見ている様子や、「私」が＜意識の流れ＞的手法によって卵と魚をめぐる連想をし、そこに第三の新たな "guiding image"を見出そうとしている点を詳しく指摘した。

水野敦子氏は、 "Earthly Delight"において、「私」が欲望と航海の連想を経て、過去の歴史家たちの冒険家としての側面に注目した様子を報告した。この画の中に、「私」はモルモン教の創始者ブリガム・ヤングを見出している。藤江氏は、「私」が二元論的世界観をいかに捉えているかの場面を報告し、中庸の道を探る「私」の姿を提示した。さらに、「私」がモルモン教の第２番目の教祖ジョセフ・スミスをキリストであると置き換えて見ている点をも示唆した。

横田由里氏は、第4部 "Restoration"における『快楽の園』の修復と家族の修復について報告した。「私」は祖母と母の死後、家族の立直し

超新星SN1987A



と心の癒しを学ばねばならなかった。過去の記憶や、宗教的想念によって、次第に自己が「再建」「再統合」されていく。同時に、ボッシュの『快楽の園』も修復されていく。ここにおいてウィリアムスは、内的世界におけるモルモン教の重要性を認識していながらも、家父長的権威に対する反発を抱くというアンヴィヴァレントな姿勢を見せていると横田氏は分析した。

吉田美津氏は、 "Restoration"の後半部において、ボッシュの画が二元論の世界から自由になり、それ自身ひとつの「真実」(its own sovereign truth)として輝いている、というようにウィリアムスが捉える場面を報告した。ウィリアムスはここにおいて修復の力を信じ、「信念とは世界に意味を見つけるのではなく、意味ある生活を作りだしてゆくわたしたちが持つ力への信念だ」と述べ、ユタの家へと戻る。修復(restoration)とは、「わたしたちがその一部である世界に対して抱く愛情の修復」であると語られている。

研究会では各セクションで活発な意見が出され、かつＬｅａｐが意味するものについて議論が展開された。朝１０時から午後7時近くまで、合計9時間にも及ぶ長時間の研究会に参加でき、私自身多いに刺激を受け、エコクリティシズムを学ぶ意欲をかき立てられたことを付け加えておく。是非大勢のＡＳＬＥ－Japan会員の方々にも参加して頂ければと願っている。

問い合わせ先： shokoi@hiroshima-u.ac.jp

書誌情報

◆David Mazel ed., *A Century of Early Ecocriticism*. Athens and London: University of Georgia Press. 2001.

D・H・ローレンスのクレヴクール論、マシーセンのエマソン、ソロー論、ペリー・ミラーの自然論、レオ・マークスのパストラル論といった入手が容易な論の抜粋ばかりか、ジョン・バローズのホイットマン、ギルバート・ホワイト、ソロー論、「自然の模倣者」論争の激しいやりとり、アルド・レオポルドやクルーチが雑誌に掲載した論文など、全部で２９の「古典的」な論文が収められている。手元にあると何かと便利なアンソロジー。大学院生相手のゼミの教材にも使えるかもしれない。（村上清敏）

◆Thomas S. Edwards and Elithabeth A. De Wolfe eds., *Such News of the Land: U. S. Women Nature Writers*. Hanover and London : University Press of New England. 2001.

副題にある通り、アメリカの代表的な女性ネイチャーライターたちを論じた論文集。類書はたくさんあるのだろうが、この分野に不案内な筆者にとってはとても刺激的であった。これまた、演習形式の授業で、適宜ピックアップしながら、学生と一緒に読んで行くのに適当かと思われる。（村上）

◆B.J.Nebel and R.T.Wright. *Environmental Science:The Way the World Works*.7th edition. Prentice-hall, 2000.

地球環境のあらゆる局面を大量のカラー図版や写真入りで解説する。７版の特徴は全章に持続可能性、指導性、健全な科学という観点が貫徹されたこと。章ごとにあるETHICSやEARTH WATCHのコラムはそれだけ拾い読みしても楽しめるし、併設されているホームページから資料の提供を受けられるのもおもしろい。（有為楠　泉）

◆Lawrence Buell. *Writing for an Endangered World: Literature, culture, and environment in the U.S. and beyond*. Cambridge, Mass. and London, England: Harvard University Press. 2001.

巨大都市シカゴのスラムを語るセツルメント活動家ジェイン・アダムズと，シエラネヴァダの大自然を語る自然保護活動家ジョン・ミューアの共通性について、という話題で「環境無意識」を論じ始める冒頭部は面白い。それ以外は，院入試の読解問題みたい。（加藤）

◆石弘之他編著　『必読！環境本１００』（平凡社、２００１）

持っているだけで安心してしまいそうで、怖い本。性根を入れ替えて、もっとちゃんと勉強しろ！と自分に言い聞かせるためにも必携の書。（村上）

◆日本生態系協会編著　『環境教育がわかる事典』（柏書房、２００１）

自分がただの怠け者ではなくて、ひとりの市民であり、また、教育者の端くれでもあるということを思い出すためにも、あるいは、「カリキュラム検討委員会」で環境教育の重要性について一席ぶつためにも、手元に置いてときどき眺めたい書物。（村上）

◆信夫隆司編著　『地球環境レジームの形成と発展』(国際書院、2000)

地球環境問題を国際政治の観点から考えることを出発点にして、７名の執筆者が地球環境レジームの形成と発展について論じている。京都議定書の行く末が案じられる今、示唆されるところが多い。（有為楠）

◆鉄村春生著『異端の森--樹木から拓く英文学』（成美堂、1998)

妖精の舞う緑のいきもの、樹木信仰、恐怖と呪いの場、異端の隠れ処等々、人間の心の原風景にある森のイメージを軸にして、中世から現代にいたる英文学作品に一貫して流れる森の系譜を丹念にたどった力作。一大ページェントの感がある。（有為楠）

（定期刊行物）

▲Naomi Uechi (上地直美),"Emersonian Transcendentalism in Frank Lloyd Wright's Unity Temple" *ISLE* vol.7.2 SUMMER 2000.

フランク・L・ライトによるユニティー・テンプルの設計には、アメリカの大地と神性と人間の統一というエマスンの理想が具現されている、と説き明かす。エコクリティシズムの新分野を開拓するユニークな研究である。（加藤）

人口１００人の地球村

もし、現在の人類統計比率をきちんと盛り込んで、全世界を１００人の村に縮小するとどうなるでしょう。その村には・・・

５７人のアジア人
２１人のヨーロッパ人
１４人の南北アメリカ人
８人のアフリカ人がいます。

５２人が女性です
４８人が男性です

７０人が有色人種で
３０人が白人
７０人がキリスト教以外の人で
３０人がキリスト教

８９人が異性愛者で
１１人が同性愛者
６人が全世界の富の５９％を所有し、その６人ともがアメリカ国籍
８０人は標準以下の居住環境に住み
７０人は文字が読めません
５０人は栄養失調に苦しみ
1人が瀕死の状態にあり
1人はいま、生まれようとしています。
1人は（そうたった1人）は大学の教育を受け
そしてたった1人だけがコンピューターを所有しています。

もしこのように、縮小された全体図から私達の世界を見るなら、相手をあるがままに受け入れること、自分と違う人を理解すること、そして、そういう事実を知るための教育がいかに必要かは火をみるよりあきらかです。

また、次のような視点からもじっくり考えてみましょう。
もし、あなたが今朝、目が覚めた時、病気でなく健康だなと感じることができたなら・・あなたは今いきのこることのできないであろう100万人の人たちより恵まれています。
もしあなたが戦いの危険や、投獄される孤独や苦悩、あるいは飢えの悲痛を一度も体験したことがないのなら・・・あなたは世界の5億人の人たちより恵まれています。

もしあなたがしつこく苦しめられることや、逮捕、拷問または死の恐怖を感じることなしに教会のミサに行くことができるなら・・・あなたは世界の30億人のひとたちより恵まれています。

もし冷蔵庫に食料があり、着る服があり、頭の上に屋根があり、寝る場所があるのなら・・・あなたは世界の７５％の人たちより裕福で恵まれています。

もし銀行に預金があり、お財布にお金があり、家のどこかに小銭が入った入れ物があるなら・・・あなたはこの世界の中でもっとも裕福な上位８％のうちのひとりです。

もしあなたの両親がともに健在で、そして二人がまだ一緒なら・・・それはとても稀なことです。

もしこのメッセージを読むことができるなら、あなたはこの瞬間二倍の祝福をうけるでしょう。なぜならあなたの事を思ってこれを伝えている誰かがいて，その上あなたはまったく文字の読めない世界中の20億の人々よりずっと恵まれているからです。
昔の人がこう言いました。　わが身から出るものはいずれ我が身に戻り来る、と。

お金に執着することなく、喜んで働きましょう。
かつて一度も傷ついたことがないかのごとく、人を愛しましょう。
誰もみていないかのごとく自由に踊りましょう。
誰も聞いていないかのごとくのびやかに歌いましょう。
あたかもここが地上の天国であるかのように生きていきましょう。

【広く流布しつつあるEメール「ある学級通信」（英語版は"Global Village"）から転載。原典は米国のDonella Meadowsによる"The Global Village"と考えられている。様々に翻案・短縮されており不正確な表現も含む。
詳しくは下記ご参照　http://www.abctales. com/abcplex/viewStory.cgi?s=6065】

▲Kato Sadamichi (加藤貞通),"Rediscovering an Ancient Poem to Save a Tidal Flat" *ISLE* vol.7.2 SUMMER 2000.
万葉集の「桜田へ鶴なきわたる～」の歌と，藤前干潟保全運動を扱ったエッセイ。

▲石幡直樹「第４回ASLE（文学・環境学会）国際大会報告」『英語青年』第147巻，第7号，2001
印象的に手際よくアリゾナ州での第４回ASLE大会の模様が紹介されている。　（加藤）

『文学と環境』第５号原稿募集

今回投稿規定の一部が９月１５日の大会総会で変更されました。以下の投稿規定により奮ってご応募下さい。締め切りは２００２年３月２０日です。第５号より大会シンポジアムのテーマ等を出来れば特集していく件も決まりましたので、関連テーマ「Urban Natureについて」の論文をお待ちしています。また自由論題も勿論歓迎です。なお論文宛先の編集事務局が変更していますのであわせてご留意下さい。

投稿規定

1.内容：文学と環境に関する未発表の論文・書評等（和文または英文）

2.枚数：和文の場合，A4判用紙に横書きで40 文字 X 30 行とし，10枚以内。

英文のレジメ1枚（1ページは65ストローク X 25行）を付すこと。

英文の場合，A4判用紙にダブルスペースで20枚以内。1ページは65ストロークX25行。和文によるレジメ（40文字 X 30行）を付すこと。

書評：和文の場合，横書きで40文字 X 30行とし，3枚以内。英文の場合，3枚以内。(1ページは65ストローク X 25行)

3.体裁：表紙には論題だけ記入し、表紙とは別紙に氏名，所属先，連絡先（Tel,Fax,E-Mail等）を記入のこと。注は本文の終りにまとめること。その他，*MLA Handbook for Writers of Research Papers*: Fourth Edition もしくは『MLA英語論文の手引き第4版』（北星堂）に準ずる。すでに口頭発表した場合は，その旨を末尾に 記すこと。

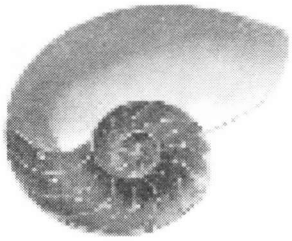
4.提出部数：5部（厳守、コピーも可）とフロッピーディスク（機種名，ソフト名を明示のこと）。

5.宛先：編集事務局（〒739-8522 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部伊藤詔子）宛。封筒に『文学と環境』応募論文と朱書きすること。

6.締め切り：2002年3月20日（厳守）。

7.採否：編集委員会が行い、一部修正を求めることがある。

8.投稿資格：投稿資格は会員とし，投稿は１名につき論文又は書評各１編までとする。ただし書評や、シンポジアム論文など編集委員会が執筆を依頼する場合は会員でなくともよい。



その他

1)提出された応募原稿は返却しない。

2)和文の場合，必ず題名には英文タイトルを，また執筆者名にローマ字表記を付すこと。

3)書評を除き，原則として執筆負担金は仕上がり1ページにつき2,000円（大学院生は1,000円）とする。

２００１年９月１５日改正

編集委員：伊藤詔子（広島大学），上岡克己（高知大学），村上清敏（金沢大学），石幡直樹（東北大学），ブルース・アレン（順天堂大学）

POSTSCRIPT

♠20世紀を象徴するアーバン・ネイチャー風景はスカイスクレイパー∈大量消費経済グローバリズム、21世紀幕開けのアーバン・ネイチャー風景はテロリズム∈難民キャンプ都市。

♥グローバル・ヴィレッジの里山・里海（コモンズとしての海）を保全・復興しなくては・・・。

ニューズレターへの投稿歓迎
スペースの都合で短縮、割愛もあり得ます。
次号発行予定は2002年3月、
原稿締切は2月23日です。

ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter No.11

2001年10月22日発行

【発　行】ASLE-Japan／文学・環境学会
事務局：〒903-0213沖縄県西原町千原１番地
琉球大学 法文学部　山里勝己 研究室内
Tel & Fax: 098-895-8295
E-Mail: yamazato@ll.u-ryukyu.ac.jp

【編　集】
編集代表　加藤　貞通
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
名古屋大学言語文化部
Tel. & Fax: 052-789-4188
E-Mail: h44558a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp